

津川主一の生涯と業績

——社会的活動を中心に——

丸 山 忠 璋

はじめに

作曲家津川主一（つがわ しゅいち）に関しては、先に「津川主一の商品研究—蔵書にみる著作物の傾向—」（武蔵野音楽大学研究紀要第44号 2012年）として、その業績について概観してきた。そこで今回は、津川の社会的活動の足跡をたどり、精神的基盤となっているキリスト教信仰にも触れながら、かれの生涯を追ってみたい。

津川は、1896（明治29）年11月に名古屋市に生まれ、1971（昭和46）年5月、西東京市保谷の地で他界した。74年と6ヶ月の生涯であった。

幼少期は、牧師であった父とともに、静岡、東京、横浜、愛知等で過ごし、14歳のときに名古屋中学校に入学、その後、関西学院神学部に進み、卒業後は東京麻布の美普（みふ）教会の牧師となった。26歳から33歳までの7年間務めた後、牧会を辞して、以後は音楽関係の著作、教育、演奏活動に専念するようになる。

社会的活動としては、戦前の東京キリスト教青年会（東京YMCA）における活躍、戦後の合唱を中心とした演奏活動、教育活動等への貢献が顕著である。

1. 誕生から13歳まで

津川は、1896（明治29）年11月16日、愛知県名古屋市桶屋町（現・桑名町）に生まれた。主一の名は、新約聖書の「主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ」（エペソ人への手紙第4章5節）に由来するという。

父・津川弥久茂（やくも）は、1863（文久3）年12月25日に、熊本藩氏族の家に生まれた。今日の熊本県上益城郡益城町木山が出身地である。主一が生まれたときは、名古屋で日本美普教団の伝道師をしていた。日本美普教団は、米国メソジスト・プロテスタント教会ミッション本部の管理下に、1880（明治13）年に横浜から伝道を開始した団体である。

弥久茂は、熊本県第五高等学校を卒業後、大坂（ママ）聖三一神学校に入学、名古屋第一美普教会牧師クラインの導きのもとに1892（明治25）年に伝道師、1895（明治28）年に牧師として伝道

生活を歩み始めた。主一が生まれたのはその翌年である。

母・つう子（つう）は、1868（明治元）年に名古屋で生まれ、名古屋英和女学校を優秀な成績で卒業し、宣教師の通訳などをしていた。名古屋英和女学校は美普教会によって設立されたミッション・スクールであったので、弥久茂との出会いも必然の成り行きであったといえなくもない。

弥久茂は、その後、静岡庵原郡（いはらぐん）の蒲原（かんばら）講義所および静岡第二美普教会の牧師を務め、1900（明治33）年に東京赤坂にあった豊分（とよわけ）美普教会に異動となる。その後は、横浜第二美普教会（1901）、愛知県亀崎講義所、半田講義所、岩成講義所を経て、1909（明治42）年4月、静岡第一美普教会に移り、1936（昭和11）年3月、教団を退任するまで同地で伝道にあたった。

主一が幼少期をつねに父と生活を共にしていたとすれば、13歳までは、上記のように、名古屋市桶屋町、静岡市葵区西草深町、東京赤坂区桜町、横浜市、愛知県半田市で生活してきたことになる。

2. 名古屋中学校時代—14歳から19歳まで—

小学校を卒えた主一（以下、津川）は、1910（明治43）年、名古屋中学校に進んだ。同校は、日本美普教団が行っている教育事業の一つとして、1887（明治20）年に設立された学校で、当初は「名古屋英和学校」と称した。

遡る1880（明治13）年、米国メソジスト・プロテスタント教会婦人会より送られてきたH. G. ブリテン（1822-1897）は、横浜山手町に女子教育事業を起こした。校舎を建設し、女子のみならず男子生徒も入学させていたが、その後、女子部は市内の蒔田（まいた）町に移転し、横浜英和女学院（成美学園）と称し、男子部は、名古屋に移り、名古屋英和学校（のち名古屋学院）と称した。（「日本美普教団規則」1940より）

名古屋英和学校の初代校長F. C. クライン（1859-1926）は、1883（明治16）年9月に来日、横浜で育英事業および伝道を開始していたが、1887（明治20）年6月に横浜を発ち、海路名古屋に向かった。到着後ただちに名古屋南部平町に敷地を求め、7月、名古屋英和学校を創立し、校長となった。

同校は3年後、市内武平町99に移転、翌1891（明治24）年には濃尾大地震に遭い、多くの犠牲者を出した。松永資料（1967）によれば、このときの地震による一般の被害は、死者2,331人、負傷者4,614人、家屋全潰23,915戸にのぼったという。

その後、名古屋英和学校は、1895（明治28）年、神学部を本科とし、普通科を予科とする。翌年9月に、内村鑑三が神学部長に就任している。1901（明治34）年4月、神学部を廃し、1906（明治39）年9月、名称を「名古屋中学校」と改めた。

津川が入学した1910（明治43）年ときの校長は、木村克巳であった。津川は5年間、この学

校に学んだ。

星野によれば、「在学中から、オルガンを川喜多みね（子）、原田彦四郎に学び、頭角を現した」（星野 1983: 225）とあるので、この頃からすでに音楽への才能を見せていたのであろう。「かれは音色や音程に対して極度に感受性をもっていたので、当初から音楽家たたくべく運命づけられていたとってよい」（星野 1983: 225）とも書かれている。

1915（大正 4）年、津川は名古屋中学校を卒業し、1 年間、神学生候補として伝道に勤しんだ後、関西学院神学部に入學した。20 歳であった。

3. 関西学院時代—20 歳から 25 歳まで—

関西学院神学部は、今日、同大学の西宮上ヶ原キャンパス（兵庫県西宮市上ヶ原 1 番 155 号）に置かれているが、当時は神戸市の東郊原田村にエキゾチックな雰囲気をもたせて建っていた。

津川はここで、声楽を大島（岡嶋）政子（まさ）から習い、コーラスの指揮、神学部チャペルのオルガニストを務め、作曲の勉強を始めた。「その天分は多方面な活動として具体化した。かれは少年時代から合唱を好み、関学在学中オルフェオ・パーティーを組織して、教会、学校、工場、病院等を歴訪した」（星野 1983: 225）。

また、生涯の友となる由木康（ゆうき こう：現 日本基督教団東中野教会名誉牧師）との出会いもこの頃である。

津川は『日曜世界』という雑誌の読者で、この雑誌によく詩歌を発表していた由木とすぐに親しくなり、かれの詩や歌に気軽に作曲していた。由木が中学 3 年のときにつくった「クリスマス・カロール」に津川が作曲した讃美歌は、「うるわし夕べに、旅人よなどかは」という初行によって知られ、今でもクリスマス・シーズンにはうたわれているという。（星野 1983: 226）

津川の詩才をうかがい知るものとして、大学 3 年のときに整理したと思われる自作詩集が遺されている。大学ノートに自作の詩百編を書き連ねたもので、浄書したかのように整った文字と文体で綴られている。タイトルは「作品集第一 百編 麻耶山麓の寮にて 1919（大正 8）年秋」となっている。青年期特有の若干感傷的な作品であるが、津川の文学的感性を知るには十分である。

関学時代の津川はよく運動もした。百メートル競走などは抜群で、歩き方も速く、飛んでいるかのようなといわれたが、その調子でオルフェオ合唱団を指揮し、あちこちに出張した。ときには東京 YMCA のホールなどでも他の楽団と共演することもあった。また、由木康、大中寅二と協力して、種々の企画や催しをした。大阪教会でアマチュア音楽会を開いたときには、津川と由木が二重唱をし、大中が伴奏したという。（星野 1983: 226）

1920（大正 9）年、津川の人生を大きく方向づける出来事が起きた。

父が牧師をしていた津川にとって、キリスト教への信仰はある意味ごく自然に受け入れられるも

のであり、将来は聖職者の道をと考えていたかもしれない。だからこそ神学部のある大学を選び、いままで学んできたのである。しかし、かれにはそれをもっと決定づけるイベントが用意されていた。

この年の10月、東京で「第8回世界日曜学校大会」が開催され、津川もそれに参加した。自著『教会音楽5000年史』（1964）のなかで、つぎのように述べている。

日本のキリスト教会に合唱の熱を巻きおこしたのは、大正9年（1920年）に第8回世界日曜学校大会が東京で開催されたときであった。数千人を容れる会場がないために、大会場を東京駅前の広場に建設したが、開会直後に漏電のために消失し、帝劇で急場を逃れた。このために1000人の聖歌隊が組織され、数ヶ月前から数ヶ所に分かれて、専門家の指揮によって練習が開始された。会期中の指揮者ならびに選曲者は、すでに米国教会音楽の項で言及した、ボストン大学の教授オーガスティン・スミス氏で、その演奏は少なからぬ感動を与え、そのころ20代だったわたくしたちの受けた感動は特に甚だしく、一生を聖なる音楽に捧げる決心をさせられたのは、わたくし一人ではなかったと思われる。わたくしと同年輩のものに教会音楽家が多いのは、そのためではなかったろうか」（津川1964:383）

1921（大正10）年、津川は関西学院大学を卒業し、1年間、母校の名古屋中学校で聖書教師を務めた後、上京して聖職者の道を歩む。

4. 麻布美普教会時代—26歳から33歳まで—

1922（大正11）年4月、津川は、東京の麻布美普教会に牧師として着任した。

麻布美普教会は、かつて伝道所時代に、父・弥久茂が1900（明治33）年から9ヶ月間牧会をしていた教会である。教会は1907（明治40）年7月に芝区烏森町から麻布区市兵衛町2-33に移り、麻布教会と改名。1911（明治44）年に麻布区材木町9に、1914（大正3）年7月に麻布区霞町25に、そしてさらに1921（大正10）年、麻布区桜田町31に移っていた。津川は父子でこの教会で牧会を司ることになる。

ただし、津川の遺品になる蔵書類のなかに、この時代に関する記録や資料はほとんど見当たらない。

津川がこの教会に赴任した2年目、すなわち1923（大正12）年9月1日に関東大震災に見舞われた。死者99,331人、負傷者103,000人、行方不明4,300人、焼失家屋447,000戸、倒潰家屋254,000戸、損害額50億から70億円といわれる未曾有の被害であった。

美普教団各教会でも大きな被害に遭った。「麻布破損、浅草全焼、小石川無害、横浜第一崩壊、第二、第三全焼、平塚、伊勢原半壊、会員の死者18名、家屋焼失90戸。横浜英和女学校 一棟を

除き校舎半壊、浅草教会は焼失後、中野区 3300、和田秀豊方にて集会を守る。横浜第一美普教会は牧師館を改築（11 月）、横浜第二、第三美普教会は解散し、日之出町教会を組織する（12 月 23 日）」（松永 1967: 20）と報告されている。

松永資料（1967）に、「1926（大正 15）年、津川主一受按（3 月 25 日）」とある。受按とは、伝道者が先輩牧師から按手の礼を受けて、正式の牧師として認められたことを示す。津川 30 歳であった。

「日本美普教団規則第 5 条」では、教会の使命についてつぎのように記述している。（1940 年年会議事録より一部抜粋）

教会は、神の聖旨において、イエス・キリストを首とせる信徒の団体なり。教会に於ては、公礼拝、祈会、聖書研究会を開き、聖礼典、儀式等執行され、一般信徒の信仰養成、宗教教育、並に福音宣伝等実施され、以て、イエス・キリストの愛と信仰との実証をなす。

基督道、神を信じ、神を愛する者は、また人をも愛す。イエス・キリストを神の独子と信ずる者は、その十字架の贖罪愛を信じ、之を生活の基準となし、以て、国家、社会に奉仕せんとするものなり。イエス・キリストの聖愛は、基督教道德の根元にして、道德実行の原動力なり。（松永 1967: 1）

麻布美普教会時代の出来事としては、1928（昭和 3）年 8 月に「第 8 回 S・S 教師修養会」が、静岡県浜名の新居で 3 日間開催されている。S・S とは教会の日曜学校のこと。「出席者 65 名、講師 近藤良薫、矢部喜好、津川主一」との記録がある。（松永 1967: 22）

また、この年の 8 月、津川は賀川豊彦の司式により、佐藤豊助・まつのみちこ（みち、道子とも）と結婚している。

津川は、この教会の体現者として 7 年間奉職することになる。

5. 音楽活動の開始—34 歳から 49 歳まで—

津川が聖職を辞した理由については、ほとんど語られていない。筆者は、背後に当時のやや形骸化した教会の体質への批判や、とくに接近を深めていた社会活動家賀川豊彦の思想の影響があると見ているが、そのことについて今回は触れない。ここではミュージズの神からの誘惑のほうがつよかったのだ、とだけ記しておこう。

『東京キリスト教青年会百年史』（齊藤実 1980）のなかに、1926（昭和元）年度の事業報告があり、その「宗教および講演部」の項目に津川に関連する記事が載っている。

宗教および講演部 委員に挙げられていたのは、小崎道雄、鶴崎庚午郎、田中龍夫、小林誠、額賀鹿之助、津川主一で、石田友治が担当主事であった。この頃の「宗教事業」は「学校、体育、社交各事業中に織り込まれて、それぞれキリスト教的感化を及ぼすように」行うことが目指された。東京キリスト教青年会事業の基盤であるとの認識であった。

定期的なものには、宗教的情操を培うコーラスのほかに、吉田清太郎指導の「宗教座談会」がある。(中略) コーラスのひとつ、混声合唱の「ベネディクト聖歌団」は、津川主一指導、堀内敬三伴奏によるものであったが、1926年の暮には解散して、「東京オラトリオ協会」を新たにたつて東京青年会を離れた。(齊藤 1980: 202)

この後も東京 YMCA の記録には、しばしば津川に関する記述が見られるようになる。ということとは、津川が牧会のかたわら、こうした音楽活動に熱を入れていたという証拠であり、以後その傾向はますますつよくなる。

聖職を退いた津川は、1929(昭和4)年前後より、青山学院神学部、自由学園、恵泉女学園、文化学院、津田塾、本所裁縫学校、東京 YMCA 等の講師となり、音楽を教えていた。

星野達雄は津川のこの頃の様子を、「牧師職を辞して音楽に生きるようになった津川の活動は、まさに水を得た魚の如くであった」(星野 1981: 52)と形容している。

さらに1930(昭和5)年4月、帝国音楽学校の講師となった津川は、同年12月にみずから教会音楽研究所を創設主宰し、以後、音楽書の執筆および月刊雑誌『教会音楽』の創刊に奔走する。また、教会音楽発表のため、東京オラトリオ協会、仙台オラトリオ協会、東京交響合唱団(シンフォニック・コーラス)などの創立指揮にあたった。

津川の活躍は、学校ばかりでなく、東京発声という映画会社での文芸ものの音楽担当にまで手を広げていた。当時一世を風靡していた映画「小島の春」や「若い人」「太陽の子」「モンテンルパ」などがヒットしていたので、戦争中、「疎開しなくてすんだとしたら、あるいは映画音楽で生活していたかも知れません」と、後年、みち夫人は語っている。(星野 1981: 53)

6. 東京キリスト教青年会における活躍

ここでは、津川の戦前の東京キリスト教青年会(東京 YMCA)におけるそのほかの活動に焦点を当てて述べる。

東京 YMCA は、1880(明治13)年5月に創立され、2010(平成22)年に130周年を迎えた。そこで、1980(昭和55)年刊行の『百年史』、および2010(平成22)年の『130年の歩み』を通して、津川の足跡をたどることとする。

1928(昭和3)年9月24日、東京 YMCA 新本館起工式が行われた。式後の会員例会(総会の意)

では、出席者一同によって、「東京キリスト教青年会々歌」（東京 YMCA の歌）がうたわれた。作詞は由木康、作曲は津川による（楽譜については未確認）。

東京 YMCA の歌（青年会々歌）

一 世紀末の 夜は明けて
白み初めし 新時代
その東雲の 光を浴び
曠き地平に 我等は立てり
ラララララ ラララララララ
(折り返し) 共に歌はん 希望の歌を
生命の歌を
(二節、三節は省略)

1930（昭和5）年1月28日、新会館献堂行事（神田美土代町）が行われた。開館式の奏楽は津川であった。

同年2月、会員部主事鈴木恂らの尽力により、グリークラブが誕生し、津川が指揮者となった。最初の練習はわずか数名の参加ではあったが、ターナー編の「メール・カルテット」を用いて行われた。この年の夏、夏期声楽講習会も初めて催されたが、その結果、秋からはグリークラブの会員が増えていった。

練習を重ねるほかに、総会や会員家族パーティなど、青年会の全体プログラムに奉仕出演をつづけ、海水浴やピクニックも行うなど、まさにクラブの名にふさわしい多彩な活動をつづけていった。（斉藤 1980: 305）

グリークラブの指導者が津川から内田榮一に代わったのは、1936（昭和11）年春のことであった。当時、東京青年会には、東京オラトリオ協会が置かれていたが、この会が指揮者津川とともに東京青年会を離れたためである。東京オラトリオ協会とは、東京青年会ベネディクト聖歌団が1925（大正14）年末に独立して設立した聖歌合唱団である。その後、組織を改めて、1936（昭和11）年1月に青年会に復帰したばかりであった。

戦争の事態は、市民生活から英語の使用を禁ずるほどになり、「グリークラブ」という名称の存続すら許さなくなっていた。1940（昭和15）年12月からは「東京青年団」と名を変えている。1942（昭和17）年末まで練習がつづいたが、しだいに急迫する時勢と会館使用上の障害があって、やがて歌声は消えた。（斉藤 1980: 306）

1930（昭和5）年8月、第1回夏期声楽講習会が開かれた。8日間行われたこの講習会は、その

後も14年間にわたって1943（昭和18）年までつづけられた。途中、名称を「夏期声楽合唱講習会」と変更している。

毎年夏に開かれたこの講習会では、楽典、発声、合唱、視唱、鑑賞、音楽史、歌曲、風琴、対位法、講演と多岐にわたって研究が行われた。第1回は、講師に津川（評論・指揮）と湯浅永年（評論・声楽）を招き、第2回からは堀内敬三（評論・作曲）と内田榮一（声楽）が加わっている。しかし、この夏期声楽講習会もまた時局に追い詰められてゆくのであった。（斉藤1980:306-307）

東京青年会では、このほかに多彩な音楽関係のプログラムが催されていた。

1932（昭和7）年には、「新讃美歌講習会」が開かれ、当時新たにつくられた讃美歌300曲の指導が行われた、春と秋にそれぞれ150曲ずつ選び、津川が歌唱指導にあたった。ほかに伴奏の石丸泰郎や、特別講師として、由木康、堀内敬三、伊庭孝、内田榮一、大中寅二らが加わった。

この講習会が終ると、1933（昭和8）年には「東京YMCA讃美歌研究会」が生まれた。

1936（昭和11）年には、年間を通じての「音楽趣味講座」が開かれた。内容も講師も多岐にわたり、「絶対音楽と標題音楽」「文学と音楽」「舞踊と音楽」「トーカーと音楽」などについて、伊庭孝、増沢健美、太田黒元雄、小松耕輔、塩入亀輔、牛山允、竹田岐三雄、山根銀二らが講師を務めた。

同年の秋深い頃から、毎月1回、会員ロビーで、津川が“Vesper Organ Recital”を開いていた。“Vesper”とはラテン語で「夕方、晩」の意である。

1941（昭和16）年10月8日から、「東京基督教青年会吹奏楽団」の練習や、翌1942（昭和17）年3月には、「第1回音感合唱講習会」が開かれた。これは、飛んでくる飛行機の機種を判別できるようにと、耳の訓練を行うためのものであった。1944（昭和19）年5月までつづけられた。（斉藤1980:308）

戦況が厳しくなり、東京YMCAの活動もつぎつぎと休止・休会となっていった。

暗い時代に一つ、明るいニュースがもたらされた。津川夫妻に結婚16年目にして初めての子に恵まれたことである。

1944（昭和19）年夏、家族は夫人みちの郷里である長野県上諏訪に疎開していた。その12月9日、空襲警報発令中に長男・唯一（ゆいいち）が誕生した。津川48歳であった。

翌1945（昭和20）年2月16日、父・弥久茂が他界した。

7. 終戦、演奏・教育活動の再開—50歳から68歳まで

1945（昭和20）年8月15日、太平洋戦争は敗戦で終わった。

その翌日早々、津川は疎開先から単身帰京した。しばらく荻窪の知人の家に間借りし、2年後、

1947（昭和22）年6月、住居を保谷市（現西東京市保谷。以下、当時の保谷市のまま表記）に移し、ふたたび音楽活動を開始した。

12月16日、神田共立講堂で、社会事業共同募金を目的とする「第1回降誕祭大音楽祭」が、東京YMCA主催のもとに開かれ、津川はヘンデルの《メサイア》を指揮した。

1948（昭和23）年、東京バッハ・ヘンデル協会を創立。東京YMCAでの合唱指導をはじめ、演奏会に各地の合唱指導にと、さかんに頼まれるようになる。

1950（昭和25）年7月より発行されている、東京バッハ・ヘンデル協会の「演奏会日誌」が、当時の状況を伝えている。

劇団『近代座』上演のシェイクスピア劇「テンペスト」出演、葦原邦子独唱会賛助出演、第4回関西演奏旅行で純粋合唱演奏会、第6回定期演奏会でクリスマス・オラトリオ、東京YMCA創立70周年記念式に出演、第7回定期演奏会で古典の夕、第8回は古典の夕、第2回関西音楽旅行では古典と民謡の集い、近代劇場第6回公演は、逍遙祭記念として「ベニスの商人」等々音楽を担当し、東京BH協会の合唱団員は各パートに数名ずつが右のいずれにも合唱出演している。（星野1981:54）

そのなかの一人、辻村克己氏はいう、「津川先生は芸術家肌でこまかいことまでうるさく、とても厳しかった」と。（星野1981:54）

なお、バッハ・ヘンデル協会は、機関紙『バッハ・ヘンデル』を1951（昭和26）年12月に第1号を出して以来、年2回刊行し、音楽界の研究、指導、発展に尽くした。

いっぽう、津川は、朝日新聞社企画部で力を入れていた日本合唱連盟に関係し、関東合唱連盟理事長となり、4選ののち名誉会長に推された。

1959（昭和34）年10月6日のNHK「黄金の椅子」に出演、木村健二郎、豊田四郎、野呂信次郎らと語り合う。いくつものコーラスが出演するなど、多くの感激の便りをいただいたという。

1960（昭和35）年6月、NETの「この人この道」では、合唱運動ひと筋に生きてきた人生を振り返っている。

1964（昭和39）年6月、NHK「黄金の椅子」第9夜「歌声高らかに～津川主一～」にふたたび出演した。

津川の演奏・教育活動に関する主な事項を、津川蔵書の資料より拾い上げて掲げておく。もちろん活動の一部ではあるが、津川の当時の活躍の様子をうかがい知ることができる。

1933（昭和8）年 37歳

・東京シンフォニック・コーラス 第3回研究発表 古典および現代合唱演奏会……本邦初

演 津川（指揮） 6月3日 YMCA 講堂

1934（昭和9）年 38歳

・東京交響合唱団演奏会 津川（指揮） 山梨英和女学校

1948（昭和23）年 52歳

・第2回東関東合唱コンクール合評会 「合唱の友」創刊号 日本合唱連盟（編纂）

アポロ出版社 1948.3

1955（昭和30）年 59歳

・東京バッハ・ヘンデル協会 第12回定期演奏会 ロマン派とロシア音楽 1月22日 銀座山葉ホール 津川（指揮）

・劇団近代劇場 第12回公演 1月23・24日 大隈講堂 津川（音楽）

・第1回合唱講習会 8月4-7日 文化学院講堂 主催：全日本合唱連盟・朝日新聞社

1956（昭和31）年 60歳

・東京バッハ・ヘンデル協会 第13回定期演奏会 イギリスの合唱音楽 1月28日 銀座山葉ホール 津川（指揮）

1957（昭和32）年 61歳

・国鉄郡山工場男声合唱団 定期演奏会 6月 郡山市民会館 津川（お祝いのことば）……
8曲が津川による訳詞・編曲

・新学制実施十周年記念 高等学校音楽発表会 12月1日 静岡市公会堂 津川（講評）
……プログラムには津川による編曲多数。

・いばらき家庭の歌集発刊記念 第1回婦人の歌うつどい 12月8日 水戸三高講堂 主催：
新生活運動茨城婦人会議 津川（講評）

1958（昭和33）年 62歳

・東京バッハ・ヘンデル協会 第14回定期演奏会 古典と民謡の夕 2月1日 銀座山葉ホール 津川（指揮）

1961（昭和36）年 65歳

・キリスト教礼拝合唱曲集 教会音楽講習会 津川（担当）

・日本産業音楽祭 第4回中部大会 9月24日 愛知文化講堂 主催：日本産業音楽祭中部委員会・朝日新聞社 津川（講評）

・日本産業音楽祭 第6回関東大会 10月8日 産経ホール・文京公会堂・厚生年金ホール 主催：日本産業音楽祭関東委員会・朝日新聞社 津川（講評）

・第6回品川区民合唱祭 11月19日 品川公会堂 主催：品川区教育委員会 津川（講評）

1962（昭和37）年 66歳

・東京コール・フェスト 5月20日 東京文化会館 主催：東京都合唱連盟・朝日新聞社・東京文化会館 津川（理事・講師）

・熊谷利男門下 第9回ヴァイオリン演奏会 6月16日 銀座ヤマハホール 津川（弦楽・合唱・指揮）

1964（昭和39）年 68歳……この秋、脳溢血で倒れる。

・鷗友学園 創立29周年記念祝賀会 5月30日午前・午後 モーツァルト《グローリア》
津川（指揮）

1969（昭和44）年 74歳

・東京女子大学英文科 シェイクスピア《ベニスの商人》公演 5月10日 九段会館 津川（音楽）

ほかにも合唱祭審査員、講評など多数あり。

8. 多方面における活躍

津川は、著作やこうした演奏活動や講習会講師といった教育活動のほかにも、幅広く社会貢献を行っている。たとえばつぎのようなさまざまな役職に就いている。（星野 1981: 54）

日本基督教団讃美歌委員会音楽専門委員
文部省教科書検定調査委員
国際オリンピック日本委員
日本音楽著作権協会理事
全日本産業人合唱コンテスト審査委員会
産業音楽祭委員
日本映画賞審査委員
日本映画録音賞審査委員
東京YMCA 評議員
訳詞家協会監事
全日本学生音楽コンクール審査員
全国青年大会審査員
関西学院評議員
全日本合唱連盟理事
東伏見小学校 PTA 初代会長

津川は、こうした仕事の合間にも、地元保谷市や長男唯一が通う学校への協力を惜しまなかった。保谷第二小学校の創立十周年記念には、同校の校歌を作曲している。

星野（1981: 56）によれば、ほかにもたくさんの学校の校歌を作曲しているという。

ひなぎく幼稚園（保谷市）
大和第二小学校（東京都）
関東学院葉山小学校（神奈川県）
由木東小学校（八王子市）
中山小学校（長野県松本市）
平和学園（保谷市）
東伏見小学校（保谷市）
ひばりが丘中学校（保谷市）
会津若松市第二中学校（福島県）
聖望学園中学校、高等学校（飯能市）
工学院大学歌

また、地元保谷市の教育委員会による「音楽鑑賞講座」を担当。レコードを用いて、音楽家やその時代、あるいはそれぞれの作品についての話を、月1回、計30回ちかくを開催している。筆者手元にある資料では、第1回が1959（昭和34）年9月、保谷中学校図書館、第22回が1961（昭和36）年6月となっている。

いっぽう、趣味の幅も広く、考古学や民俗学方面にまでおよんだ。保谷の町はもとより、ずっと秩父方面から足をのぼして日本各地を歩き、海外に資料が出たときにはすかさず取り寄せて調べたという。

1960（昭和35）年頃、保谷自宅に招かれた星野達雄は、「さまざまな旧石器、石器、斧、メノウ等の掘り出し物を拝見したものである」（星野1981:56）と述べている。

津川蔵書のなかにも、考古学に関する海外の雑誌や新聞の切抜きなどを見かけるが、紹介は別の機会に譲ろう。津川みちによる「津川主一を偲ぶ」（1981.5.3）でも、1ページを割いて写真といっしょに思い出が語られている。

9. 闘病生活のなかで—69歳から74歳まで—

1964（昭和39）年10月21日、津川は突然脳出血で倒れた。68歳。おりしも東京オリンピックの開催中（開催式は10月10日）で、日本中がわき立っている最中であった。

以後、伊豆長岡温泉療養所、東京同愛病院、田無市（現・西東京市）指田病院、長野県鹿湯（かけゆ）温泉療養所等に入院して再起を図った。

“合唱の父倒る”と報ぜられて間もなく「津川主一さんを助ける会」が保谷町原田彰俊町

長の呼びかけで作られた。全国からの見舞金品がどれほど、津川一家を励まし助けたか知れない。有名無名から寄せられた見舞状はたちまち山と積もった。地元小学校の子どもたちからたくさん絵も贈られてきた。それら一通一通、一つ一つに慰められながらも、7年にちかい療養生活のかいなく、1971（昭和46）年5月3日午前9時37分、心衰弱のため、ついに天に召された。ときに74歳。（星野1981:56-57）

療養中の津川を励まそうと、全国からお見舞いが寄せられている。なかにはつぎのように演奏会を催している例もある。

津川先生、お見舞い演奏会 四つの合唱団と合同合唱の演奏 1967.12.9 沼津市公会堂 挨拶：中村義光

プログラムは、「宗教名曲集」「世界の民謡」「オペラ曲集」「ハイドン オラトリオ《四季》より」「グノー《聖チェチリア荘厳ミサ》より」「ヘンデル オラトリオ《メサイア》より“ハレルヤ”」など、すべて津川訳詞または編曲による作品ばかりである。

1971（昭和46）年5月6日、青山学院で津川の葬儀が行われた。

盛大な葬儀。控え室も満員。庭のテント椅子もそれもいっぱい。司会：武藤健・水野正己、オルガン：奥田耕天、独唱：内田榮一、指揮：長谷川新一で、東京少年少女合唱隊が天使のように歌い上げてくださる。（津川みち1981:9）

10. 思い出のなかに

津川が世を去って10年を経た1981（昭和56）年5月3日、東京神田YMCAにおいて、津川を偲ぶ10年記念会が催された。遺族のみち夫人、ご子息唯一両氏の手によって、小冊子「津川主一を偲ぶ」が参加者に配付された。主一の合唱作品や讃美歌を含む18ページほどの冊子で、数々の写真とみち夫人による思い出話がつづられている。

同年に出版された星野達雄による「YMCA 人間抄史(4)」『別冊 東京青年 4月号』（1981）のなかにも、「日本合唱界の父 津川主一」と題して、津川にまつわるみち夫人の談話が寄せられている。津川の思想や人となりがよく表されているので、少々大部におよぶが再掲をお許し願いたい。（星野1981:57-58）

日本人のコーラス好きたちは、宗教音楽を利用しようとはするが、宗教の真髄にふれることは避ける。それならば唯物史観に徹するかといえば、かならずしもそうではない。われながら

自国民の気持ちがよくわからないのである。

日本の音楽は五音音階ですから、合唱するとき、ミ・ファとシ・ドの音程がむずかしく、その半音の上下が身についていませんでした。リズムでも、付点八分と十六分音符のワルツなどによく出てくるのがむずかしく、いい加減にうたいますと「そんな気持ちでもし飛行機でも操縦したら、とっくに墜落しているぞ」と叱られ、同じあやまちを二度くりかえしたら、こっぴどく怒鳴られる、きびしい訓練でした。

いつもノートと鉛筆を持ち歩き、寝るときも枕元に置いて、頭にひらめいたことを書きとめ、またつぎつぎとたくさんの中の本を読み、どの本の何ページに何と書いてあるかまで覚えているほどで、いつもびっくりさせられた私でした。

またつねに新しいことに興味をもち、雪男についても、スイスのネス湖の怪獣、空飛ぶ円盤などについて、新聞や雑誌に話題を提供しました。

音楽も詩も小さい頃から始めていましたが、学校以外に先生について習ったというのは、オルガンの手ほどきを受けたほんの短いあいだで、どこの音楽学校へも行きませんでした。留学もせず、ひたすらいろいろな本を読み、自分の頭で消化吸収し、制作して行きました。

もうひとつ、私たちは日本人だから日本語に訳したものをうたって、はじめて自分にも人にもわかってもらえるという信念から、訳詞の合唱曲だけを発表してきました。そしてコーラスのどのパートもうたっておもしろいふしにしたいことを、アクセントを合わせることを中心的に考えてやっていました。

おわりに

本稿では、津川の生涯を、著作関係を除く社会的な活動を中心に述べてきた。74年の生涯を大きく三つの期に分け、私見も交えて、もういちど簡単に振り返ってまとめとしたい。

〔第1期〕

津川が大学を卒業する25歳までを第1期とするならば、この期はキリスト教精神と西洋音楽の基礎を学び、人間性の土台を築いた時期といえる。

牧師の家庭に育ち、幼少時からキリスト教の教義に触れ、さらに名古屋中学校、関西学院大学神学部と進んで教養を深め、伝道者としての素地を養っていった。その間、オルガンや声楽を修得し、さらにコーラスの指揮や作曲を学びつつ、音楽家としての下地を築いていった。

大学時代に出会った仲間との交流も見逃せない。文学や音楽に秀でたクリスチャン学生たちに大なり小なり影響を受け、みずからの生き方について考えさせられたであろう。

[第2期]

26歳から49歳（終戦）までの24年を第2期とするならば、この期は伝道者としての7年間とその後の音楽活動に熱中した時期とに分けることができる。

父の跡を継ぎ、聖職者として麻布美普教会の牧会に励んだこの期間はそう長くはなかったものの、自身の信仰を問い固めるには十分であったろう。伝道の方途にもさまざまある。神が津川に命じたのは音楽活動を通した伝道師の姿であった。

東京YMCAの記録には、30歳頃からの津川の名前が見受けられる。音楽主事として、もっぱら音楽方面の、とくに合唱活動に熱心であったことがうかがわれる。

33歳で牧師職を辞した津川は、いっそう教会音楽の普及活動に打ち込んでいった。あちこちの学校で音楽を講じるかたわら、東京YMCAグリークラブ、東京オラトリオ協会、仙台オラトリオ協会、東京交響合唱団などを創立し、指揮者、合唱指導者として活躍した。合唱曲集などの著作も頻繁となり、多忙をきわめた。

この時期は、日本が戦争に巻き込まれ、軍国主義のなかでの音楽活動であったことも忘れてはならない。

[第3期]

戦後の50歳から亡くなる74歳までを第3期とするならば、病に倒れる68歳までのおよそ19年間は人生の円熟期であったといえよう。著作物も多く、その指導力も定評を得ていたところから、各地の合唱団から作曲・編曲の依頼や指導の要請が相次いだ。津川みずからも東京バッハ・ヘンデル協会を率いるいっぽうで、日本合唱連盟役員や関東合唱連盟理事長を務めるほか、講演などで全国を飛び回る日々であった。

学校や社会教育関係での出番も多く、個人的には考古学など幅広い趣味に明け暮れ、人生を謳歌した時期であった。

68歳で倒れた後は長い療養生活を余儀なくされたが、その間も病床からあちこちの合唱活動にエールを贈っていた。

津川の生涯と業績を語るためには、今回まとめた経歴とともに前回の著作物の内容や傾向を合わせ、さらにそれぞれについて時代背景をもとに考察を加え、思想や行動の特長を明らかにする必要がある。津川伝記を筆者の今後の課題としたい。(了)

■参考文献■

- ・ 齊藤実 1980『東京キリスト教青年会百年史』東京：東京キリスト教青年会。

- ・ 齊藤實 2010『東京 YMCA130 年の歩み 東京 YMCA130 周年記念』東京：東京 YMCA。
- ・ 津川主一 1964『教会音楽 5000 年史』東京：ヨルダン社。
- ・ 津川みち／津川唯一 1981 年 5 月 3 日「津川主一を偲ぶ 10 年記念会」。
- ・ 日本キリスト教団広尾教会「広尾教会召天者名簿」2009 年 11 月 1 日、召天者祈念礼拝。
- ・ 星野達雄 1981「日本合唱界の父 津川主一 YMCA 人間抄史 (4)」『別冊 東京青年 4 月号』東京：東京キリスト教青年会。
- ・ 星野達雄（編）1983「日本合唱音楽の父 津川主一」『ゆたけき人再発見 YMCA をはぐくんだ人々』東京：東京キリスト教青年会。
- ・ 松永徳次郎（編）1967『日本美普教会年譜』東京：信愛社団。

Shuichi Tsugawa: His Life and Contribution to the Society

Tadaaki MARUYAMA

Through his numerous publications as well as his compositions and arrangements of choral music, Shuichi Tsugawa (1896–1971) contributed to the introduction and popularization of Western classical music in Japan. His publications include: studies on hymns, the history of music, American musical culture, liberal arts, choral music and conducting; translated works on J. S. Bach, Stephen Foster, and American spirituals; a number of scores of church music, foreign songs, choral music and organ pieces. (Cf. Tadaaki Maruyama, “Shuichi Tsugawa's Academic Works—A Study on Works Found in His Library,” *Bulletin of Musashino Academia Musicae*, XLIV, 2012) This paper discusses Tsugawa's life and his social activities.

Born in Nagoya in 1896, Tsugawa spent his childhood with his father, a pastor. They moved several times, living in Shizuoka, Tokyo and Aichi. After graduating from Nagoya Junior High School, he entered the Faculty of Theology, Kwansai Gakuin University. Tsugawa served as pastor at Azabu Methodist Protestant Church for seven years (1922–1930). After resigning the post of pastor, he devoted himself to writing about education, music and music performance.

This paper focuses on Tsugawa's pre-war activities in the Tokyo YMCA and his post-war music performance, chorus training and music education. In sum, his life was that of an evangelist preaching on Christianity and Western classical music.

津川主一の生涯と業績 ——社会的活動を中心に——

丸山忠璋

津川主一（1896–1971）は、合唱曲の作曲・編曲のほかにも多くの著作物を通して、わが国への洋楽の導入・普及に努めてきた。讃美歌、音楽史、アメリカ音楽文化、音楽教養、合唱音楽、指揮等に関する著作、J. S. バッハ、フォスター、黒人霊歌等に関する翻訳書、教会音楽、外国歌曲、合唱曲、オルガン曲に関する多くの曲集を手がけているが、それらについては、前稿（『武蔵野音楽大

学研究紀要』第44号(2012)で述べた。そこで本稿では、津川の社会的活動を中心に、かれの生涯と業績について述べる。

津川は、1896年名古屋市に生まれ、幼少期を牧師であった父に付いて静岡、東京、横浜、愛知等で過ごし、14歳から名古屋中学校、関西学院神学部へと進み、1922年、東京麻布の美普(みふ)教会の牧師となる。1930年、牧師職を辞した後は、もっぱら音楽に関する著作と教育活動、演奏活動に専心する。

本稿では、とくに津川の、戦前の東京キリスト教青年会(東京YMCA)における活躍、および戦後の演奏活動と合唱指導への献身、教育活動における業績等に触れる。総じて、津川の生涯は、キリスト教と西洋音楽を通じての伝道にあったと集約することができる。